奈良のむかしばなし 12

文・山崎 しげ子 随筆家

業平道と姿見の井戸

平安時代の歌物語として有名な『伊勢物語』。主人公は、美男の歌人、在原業平とされる。

その業平が、奈良に住んでいたという。今の天理市櫟本町の在原神社あたり。その住居跡に在原氏の氏寺、在原寺が建てられ、明治初年に廃されて在原神社となった。境内にささやかな社殿があり、業平と父の阿保親王（平城天皇の皇子）を祀る。

その昔、業平と紀有常の娘はこのあたりで育った。幼い二人は井筒の井戸に姿を映して遊び、愛を育み、やがて夫婦となった。井筒は、木や石を四角く組んで井戸を囲ったもの。

ところが、恋多き業平は、やがて河内（大阪府）高安の恋人のもとに通い始めた。

それでも、妻は嫉妬もせず、生駒山地を、しかも夜に越える夫の身をひたすら案じた。

ある日、業平が高安に行き、恋人の家をそっとのぞくと、あろうことか、自らしゃもじをもって飯を盛っている。貴族の女性なら考えられないその品のなさに業平は興ざめし、以来、通わなくなった。

＊

業平が住んでいたとされる在原神社（天理市）から河内の高安まで、彼はどんな道を辿ったのか。特定することは難しいが、まずは西へ車を走らせた。

神社から約五分の鉾立（大和郡山市新庄町）。「業平姿見の井戸」と蕪村の句碑がたつ。

伊豆七条から今国府（大和郡山市）へ。安堵町には富雄川にかかる業平橋がある。法隆寺前を通り、藤ノ木古墳南の道を進み、竜田川（斑鳩町）を渡る。福貴畑、杵築神社をへて、十三峠（平群町）へ。峠を越えると、大阪府八尾市だ。高安も近い。

在原神社から高安まで、ほぼ舗装道路が続くが、斑鳩町の一部に田の畦道もある。ざっと三十五キロ。かつて、業平が馬で通ったとしても、山越えの道はあまりに遠く、ことに夜は危険すぎる。男が恋に生きるのも楽ではなさそうだ。

世阿弥の代表作、能『井筒』。シテ（主役）の妻が、亡き夫、業平への一途な慕情を語り、井筒を覗き込みながら業平を偲ぶ。幽玄美の極致。

（写真：金春欣三）

業平の河内へ通う姿を詠んだ蕪村の「虫鳴くや河内通ひの小提灯」の句碑（左）と、「業平姿見の井戸」（右）。大和郡山市新庄町鉾立にある。同じ言い伝えの残る井戸が斑鳩町にも。

在原神社、姿見の井戸（鉾立）へはJR櫟本駅下車。業平橋、姿見の井戸（斑鳩）へはJR法隆寺駅下車。十三峠へは近鉄平群駅より西へ約5キロ。